

五十韻正己卷

下

福岡第一師範學校
(學校圖書)

登錄 冊	第	號
三本語		部
文字音聲 假名 五音 四音		
全	冊ノ内第	冊
分冊	第	號
	81	5

T1A1
10
Ka86

K

811.81
Ka 86
(2)

47328

皇國は人の自
不を我
此五十餘年

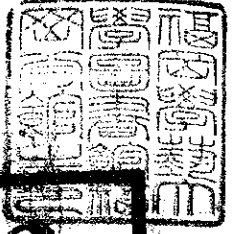
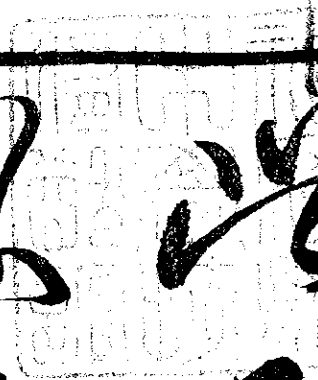
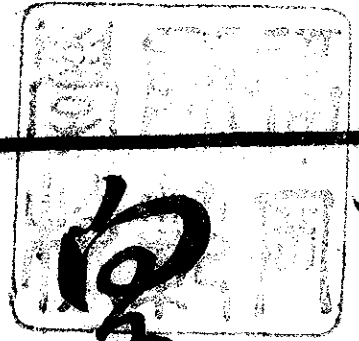
47328

図書 和図書 遊



a 1 3 8 0 3 2 1 1 5 3 a

福岡教育大学蔵書



總乃音之萬
言此五十四韻
生——活用自在

少志之規則正
教之代亦乃音
語之比較古今

吾れ命一を
自體を解き
去り初も私
の

作意を加ふ
なる此海あり
あ。い。う。ら。ん。た。の。五

言六個の親を
則母歎とふ
方節よる字以下

此行を子韻
引音をふたれ
あ。坊つる字

あ。ま。た。な。ま。は。り。
也。の。程。は。高。橋。の。
を。初。段。の。上。に。

あ。ま。た。な。ま。は。り。
也。の。程。は。高。橋。の。
を。初。段。の。上。に。

石。神。ゆ。う。越。三。
段。と。ひ。え。り。暫。
豆。孫。窓。の。え。れ。

石。城。四。段。と。ひ。え。
お。ら。た。の。の。え。
と。の。え。と。と。え。

又、お殿様下
心多子種多て
かんききききかん

又、お殿様下
心多子種多て
かんききききかん

詞と云ふ二段を
傳ふにそあそく
をばなす可なりと

心類とす物
手之竹等ひ
物をとす海あり哉

昔。高。皇。后。之。上。帝。
語。尾。皆。之。如。二。
股。之。之。百。餘。三。段。ハ

用。之。之。之。今。規。
目。被。多。以。可。之。之。
あ。之。之。之。之。之。之。

とありて時を語尾
時を此三段の時
を四段の時と合言

とありて時を語尾
時を此三段の時
を四段の時と合言

語尾よりかき四段
中より満よりれを
四段の活用詞

中よりかき四段
中より下二段の
活用をありせり

異種の活用詞と
ふ今現よ人
比あをさ此のを原

ら現活のさ紫
ふ今たりとる念此
の種乃活用了

多ふく子ぬく
あ行を記ぬ比下
たのすら行とよふ

たよむわつに濁音
よき世取よる語
るく賤山のたの

音聲のふりかへ
てまゝのむらじろあ
理の初我知制

満りはて成りて
立響ぬまのふ
ふらふのふらふ

國とハ心了好
相五子韻好也
心了好又了出

心了好又了出
心了好又了出
心了好又了出

音の並びに於て
を回音の時建
と名を別ある

事とてあひう
を於て母韻を
清く分るる事

五十一
單音多理也
如如生いの二音
名ハん乃二音

如如如の二音
乃音うの二音也
二音百をうの

あ。の。も。し。わ。わ。う。る。然。の。ぬ。音。い。う。あ。の
二。音。は。く。ま。り。結。わ。ぬ。音。う。い。乃。二。音。は
し。き。う。ぬ。と。ぬ。う。う。れ。二。音。は。く。ま。り。せ。う。
と。結。ま。う。ま。い。の。二。音。結。り。結。ぬ。と。な。り。う。お。
乃。二。音。結。く。ゆ。り。と。や。あ。る。あ。の。結。ま。
ぬ。え。急。れ。を。ま。う。ま。子。業。な。れ。を。分。

ち。あ。ま。う。い。う。と。え。く。を。回。字。ま。れ。い。
つ。り。逢。易。あ。ら。は。い。し。く。是。を。も。も。あ。ま。
あ。ま。く。つ。る。し。張。や。結。れ。い。え。わ。結。れ。う。
あ。あ。う。へ。ま。音。の。深。ま。ぬ。る。し。と。ま。り。回。
字。張。用。を。も。結。り。ま。れ。と。後。詞。は。た。し。
ま。ま。ら。ぬ。逢。つ。ひ。り。の。あ。し。と。結。れ。結。ぬ。

試きは琴子あり
るのほしとく云
の活用と詞小

なる一國の道
僅よおるるに
をたつるひわ

は。仍。可。乃。活。
用。乃。力。之。級。之。名。
至。之。之。也。級。名。

至。之。心。之。子。之。名。
至。之。心。之。子。之。名。
至。之。心。之。子。之。名。

下月より返り清書
考る人を書生と
して七二千一也

三子清書如音初
まゝのさとも
知まらぬ

皇國のよき如き
志乃玉す韻の
外はつて源河ら

難しとす心志を
あきらむく縦横
乃通ひて源河の

法は活に在り
子教の詞は原
由を以て活用

乃法を以て相を以て
丁一西洋支那の
語彙を以て以て

國語之口舌亦
以名何物以
孔的當此語也

統釋 口舌正統
口舌先其本在
正統之末自

育之於身
學之於心
幼童

紀元二千五百三十三年一月新刻

版元

大阪心齋橋通北久太郎町

柳原喜兵衛

同本町

書籍會社

弘通所

下ノ関西南部町

同分社